蓮台火事

鶴岡の大火で過去最大のものは、文化4年（1807）4月8日午後2時頃発生した、十三軒町の曹洞宗蓮台院本堂と、書寮の間の縁の下を出火場所とする「蓮台火事」である。蓮台院の山門が七軒町にあったことから、火元町を七軒町と記す史料が大半である。

当日は折からの月山ダシ（東風～東南風）に煽られ、火は見る見る鶴ヶ岡城の南東方向に位置する南町から、西方あるいは北西方向へ6時間にわたって燃え続け、938戸を類焼して午後8時に鎮火した(「酒井家世紀」)。この大火で1人が焼死した。

大火前は日照りが続き、空気が乾燥していた。強風のもと、蓮台院から古川小路・南町・一日市町・七日町へと延焼していった。途中、廣済寺・光明寺・宝林寺・西楽寺・中央院・金剛院・柳福寺が罹災した。柳福寺の時鐘堂も焼け落ち、その後の時鐘には常念寺の鐘を代用した。七日町大橋も、乱れ杭だけを残して焼け落ちた。

町家は勿論、庄内藩士や給人の家も、次から次へと罹災した。元曲師町・白銀町・百間掘端・上肴町・稲荷小路・田元小路・坂ノ上・鍛冶町に延焼し、火はついに酒井家の菩提寺大督寺へ達した。この時、婦女子等が位牌を持ち出し、暫時の間、学校（致道館か）へそれを安置した。さらに火は新町から鶴岡の西端青龍寺川を超えて、大海町へ飛んだ。

風の向きが南東に変わったためか、火勢は鶴ヶ岡城西側の家中新町へ及んだ。このため、御用屋敷や朝岡助九郎・白井惣六・石川猪太夫をはじめとする、家臣の屋敷60棟を焼き尽した。

この大火によって町家580棟、庄内藩士や給人の屋敷175棟、寺院17ヵ寺、雑小屋70棟、土蔵40棟、その他を焼失した。

多くの寺院が罹災したことも、この大火の特徴の一つであった。焼失寺院には前記のほか、安国寺・光安寺・禅源寺・禅龍寺・清水寺・護台院・清蔵院・松尾寺等がある。

この日、庄内藩はただちに飛脚3人を仕立て、大火の模様を江戸へ急報した。4月15日には、幕府へ文書と絵図で大火の状況を報告しており、その控「焼失之覚」が残されている。

焼け出された家臣等は、それぞれ親戚や知人に身を寄せた。江戸在府中に小姓頭役を拝命して帰郷した白井矢大夫は、自家が罹災したため寄るところがなく、暫く借家住居をした。

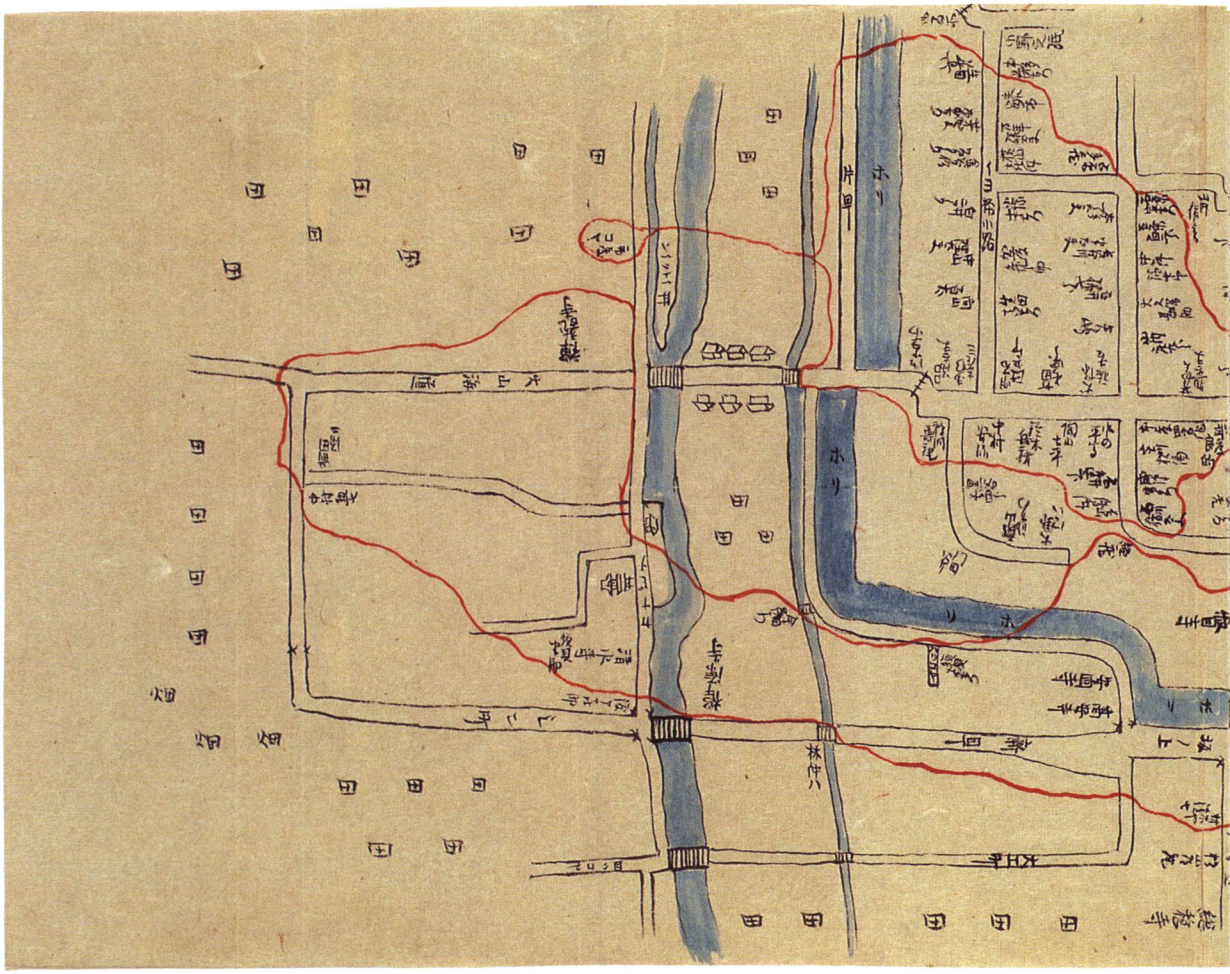
ところで出火原因については、蓮台院の小僧がいたずら心で蛙に灸を据えようとしたところ、蛙が縁の下に逃げ込んでしまい、小僧の持っていた種火が積んであった柴木に燃え移ったためと伝えられている(「自娯抄之内雑説書」大泉叢誌巻84)。一説には蓮台院の小僧が荒町の飲み屋の酒代を踏み倒していたため、その飲み屋の主人が冤罪を小僧に着せて讒言したことによるともいわれている。

市中引き廻しの刑を受けた小僧は、荒町の飲み屋の前を通りかかったとき、「自分は火のいたずらなんかしていない。飲み屋のおやじの告げ口によるものだ!!」と、大声で言い放ったという。

後日、子供のいなかった飲み屋の主人が養子を迎えた。ある時、養子先の家で祝い事があった。飲み屋の主人は養子先へ祝い餅を持参した。ところが、たまたまその養子先の家で火災が発生し、飲み屋の主人が焼死してしまった。この後、巷間では、無実の者に罪を着せたむくいであるという噂が広まった。

なお、現在の住職・地主鉄明氏は、当時蓮台院は堂宇の一部か庫裡を新築していたので、散乱していた鉋屑などに着火したのが出火原因ではなかったかと語っている。

土岐田正勝　（酒田市文化財保護審議委員）



文化４年４月鶴岡蓮台院火事絵図／鶴岡市立図書館蔵

文化四年卯四月　公義ハ西差上筑前ヘ書付写

私領分羽州庄内表国境下七郷ヶ年貢米ハ当月八日五ツ時出火

郡失之名

一　田畑　長百五十五町
一　侍屋敷　六十軒
一　町家　五百四十軒
一　民家　四軒
一　橋頭　八ヶ所
一　経塚　一宇
一　堂社　十二宇
一　社人　一軒
一　三ノ曲輪門　壱箇所
一　鳥居　七本
一　柱大小　三ヶ所
一　所々本戸柵　十五ヶ所
一　ノ木戸　壱ヶ所
一　駒寄柵　十ヶ所
一　焼死人　一人

一　田畑　長百五十五町
一　侍屋敷　百十五軒
一　民家　六軒
一　寺　十二ヶ寺
一　念仏堂　一宇
一　経塚　一ヶ所
一　隠殿　六軒
一　陰陽師　一軒
一　ち屋　四十
一　寄場　一ヶ所

右之通焼失仕候ニ付為御内別紙
ヲ以申上候　牛馬保様ヲ以申上仕候ニ付
別紙ニ上

陸奥